



publishinghouse:2-19-52Moriyama Kanazawa  
Jodo Shinsyu Jhokoji phone 076-252-4922  
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2014.07.01

## 大慈救世聖徳皇

鈴木大拙館館長 木村 宣彰

木村でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。もうずいぶん浄光寺さんにご縁をいただいたいて、浄光寺さまにご縁をいただいたお陰で、鈴木大拙館の館長もさせていただくことになりました。皆さんもどうぞおでましをいただければと思います。今ほども司会者の「生憎のお天気」というご挨拶がありましてたけれども、確かに雨が降ると足元が悪い。でも、これはやっぱりお天道さまもお前たちの思っているようにには娑婆は動かんぞ、はから

いを捨てて生きなければならぬぞ、ということをお教えていただいております。もしかしないと私は思っているのですよ。「日々是好日」という言葉がありますが、晴れた日だけが好日で、雨の日は悪い日と思いがちだけれども、本当は雨の日も晴れた日も好日、いい日なんです。雨の日がなかったら晴れの日もないし、晴れの日がなかったら雨の日もないし、両方ともがお陰さまで生きていくわけですから、そのことにやっぱり感謝をさせていただくようになったらいいんだらうと私は思っ

ております。

さきほど、太子のご和讃のお勤めがあったと思えますけれども、あのご和讃を聞いておると御開山、親鸞聖人は、やっぱりこの聖徳太子のお陰でという思いが本当にあそこ盛り返まれていると私はいつも思っているんですね。「和国の教主」、日本に仏法を広めていただいた、その聖徳太子さま、そのお陰で私は本願他力のお念仏に遇うことが出来たんだと、そういう喜びが満ち満ちている。ですからそのことを、まず感謝しなければいけない。

第一首目は「他力の信をえんひとは／仏恩報ぜんためにとて／如来二種の回向を／十方にひとしくひろむべし」(真宗聖典・五〇八頁)

みんな「べし」という言葉がついておる。親鸞聖人は「弟子一人ももたず」と仰せになつておるんだから一体誰に命令しているのだから私は最近いつも思っておったので。これ、如来の恩徳に報いようと思っておつたら、十方世界、あらゆる世界の人たちにお念仏をひろめ

ましよう。そのことが聖徳太子さまからいただいた恩徳を返すことだとう仰せになつておるわけです。

さらに二首目は「大慈救世聖徳皇／父のごとくおわします／大悲救世観世音／母のごとくおわします」(同上)

聖徳太子は今から一四〇〇年ほど前に飛鳥にいられた。これは地上に現れた方ですけれども、大悲救世観世音、お浄土の阿弥陀さんのお慈悲を象徴するのが観世音菩薩ですよ。観世音菩薩にはなかなかお会いできない。私たちの目ではなかなか会うことはできないけれども、その観世音菩薩が救世観世音として、聖徳太子としてこの世に現れてくださったのだと親鸞聖人はいただいております。ですから、この世に現れた聖徳太子は、お父さんのようだと。でもその大本の観世音菩薩は、会うことも、声を聞くこともできない。西方十万億に阿弥陀さんがいらつしやるといっても、飛行機に乗ってちよつと行つてくる、そんなことできませんよ。こちらからは行けないけれども、向こう

からおいでいただいておりますと、こうおっしゃっておるわけです。それは、お父さんとお母さんのようなものだと。そうすると両方のはたらきで私たちは仏法に遇わせていただいておりますとこういって、両親のように感謝なさっておるわけですよ。それが二首目のご和讃ですよ。

そして三首目は「久遠劫よりこの世まで／あわれみましますしるしには／仏智不思議につけしめて／善悪淨穢もなからしむ」（同上）

このご和讃では「久遠劫よりこの世まで」、「この世」とは今私たちが生きているこの世です。しかし、今だけの問題ではないですよ。久遠の昔から私たちのところへ様々なおはたらきをいただいております。久遠劫とは大昔。数えられない位の大昔。大昔から今まで。前のご和讃では「はるか彼方のお浄土の観音様とこの世に現れた聖徳太子さまと時間、空間、両方で私たちのところへいろんなおはたらきをいただいております、こうおっしゃっているわけですよ。

よく娑婆ではね、「人事を尽くし

て天命を待つ」という言葉があるでしょう。精一杯わしはやったんや、後は天命を待つだけだ。でも親鸞聖人の教えをいただいた大谷大学の初代学長である清沢満之という人は、「天命に安んじて、人事を尽くす」と。これは同じようで大分違うと思うのですよ。「天命に安んじる」、先ほどの天気の話では、いい天気、悪い天気、私たちはどうすることもできないわけですよ。その中で私たちは生かさせていただいております。「天命」、お浄土の観音様は無限のいのちを持っておる。聖徳太子さまは四十九歳で亡くなったわけですよ。これは限りある命ではないですか。では、無限のものと有限のものとはちがが大きいかといったら、それは無限のものが大きいに決まっていますよ。天命のほうは無限のもですよ。

この間、日野原先生（日野原重明・聖路加国際病院名誉院長）にお会いしたら、「明後日で誕生日が来て百〇二歳ですよ。来週はアメリカへ行くんですよ。アメリカへ行ってマンハッタンの高いビルの上をヘリコプターで上から見てみたい」と。

それでヘリコプターの切符を買った。しかし、このヘリコプターには九十九歳までと書いてあった。「私はまだ元気で日本からはるばる来たから」と、なんとか頼んで乗せてもらった。これを帰りの飛行機の中で原稿を書いて、私はヘリコプターでマンハッタンを上空から見えましたと新聞にこう書いてあるんですよ。と

つてもなくお元気ですよ。でも日野原先生も有限なる寿命ですよ。私もそうです。皆さんもそうです。でもお浄土の無量寿仏、無量寿は限りないのちです。限らないのちのものと、限りあるいのちのものと、どちらの方が大事かといったら、それはやっぱり無限のものの方。私たちはを超えておるのだから。人事を尽くして、天命を待つておったら、私はこんなに努力したんですよ、こんなに働いたのになんで報われんのやと天命に腹を立てますよ、きつと。大事なのは「天命に安んじて、人事を尽くす」ですよ。最終的には「おまかせ」ですよ。私たちはどんなに努力したって、どんなに健康に気をつけても我々は有限の世界に生きてお

るわけですよ。でもわれわれはどうしてもはからいがあるからの人事を尽くして、天命を待つておる。でも本当は「天命に安んじて、人事を尽くす」こと、これが他力ということですよ。

私の自坊のところに椿つばきがありまして、ずっと眺めておるとね、花がポトツと落ちる。でもね、花は散るけど、花はなくならない。ひとつひとつの花は散っても、無限のひとつのいのちの中に生きておるわけですよ。椿の花が散ったぞ、これでお終いではなく、また来年花が咲く、これはやっぱり無限の大きないのちではないですか。これを親鸞聖人は、無量寿仏と仰せになつておる。私たちはそのいのちを頂戴して生きておる。

聖徳太子は私たちに大事なことを伝えるためにこの世の中に生まれていただいた。でも四十九歳という縁尽きて亡くなった。なんと残念なことだと思いかもしれないけれども、親鸞聖人は大慈救世聖徳皇と。聖徳



「睡蓮」(ちぎり絵) 今崎信子

太子さまはお父さんのようなものとしてこの娑婆に現れていただいた。また、お浄土の観世音菩薩は無限のいのちをもつて、私たちのことを想ってくださいている。「久遠劫よりこの世まで あわれみましますしるしには」私たちが生まれるはるか彼方からおはたらきがある。時間的にいえば無限の時間、現在のものとはるか彼方のものと両方相まって私たちを導いていただいておりますのご和讃に書いてあるんですね。

親鸞聖人のおかげさままで聖徳太子の教えを蒙って、そして法然上人に会うことが出来たんだ。ですからお太子さんは、親鸞聖人のいわば第一

の善知識、よきひとですよ。要するに先生です。私たちは、法然上人が親鸞聖人の先生とよく聞いておるわけであるけれども、しかし親鸞聖人がどうして法然上人のところへ行くことが出来たのか。どういう因縁があったのか。それは聖徳太子のお導きですわね。二十九歳の時に比叡山を下りて、六角堂に籠もられたわけでしょう。なぜ、六角堂にいらしたのか。他にも一杯あるだろうに。それは聖徳太子のお建てになったお寺だから行かれたのでしょうか。しかも親鸞聖人は九歳で出家されて、比叡山で二十年も修行されたわけでしょう。なぜわざわざ京都の街中へ行って六角堂に籠もらないといけないのか。それは余程のことだと思えますね。それはやっぱり、自分はどう生きたらいいのかという悩み、ある種の絶望ですよ。それは生死出づべき道をたずねられたところおっしゃっていますね。一体、私はどう生きていきたいのだろうということに悩まれたんです。それで六角堂に百日籠もるぞと決心して、九十五日目に聖徳太子の夢のお告げがあったと親鸞聖

人はおっしゃっていますわね。その時にどういうことがあったのか、親鸞聖人の奥様の恵信尼さまが手紙に書いてくださった。「山を出でて、六角堂に百日籠もらせ給いて、後世を祈らせたまいけるに、九十五日のあか月、聖徳太子の文をむすびて」(真宗聖典・六一六頁) 夢の中で聖徳太子の文を結ぶとはどういうことか。結ぶということは、自分が何かを考えていることがあって、その答えがでるといことですよ。結論がでる。問いがあっても答えがでなかったら結びにならない。

親鸞聖人が大切にされているお経のひとつに『涅槃経』というお経がありますね。お釈迦様が一番最後にお説きになられたお経。その中には雪山童子の話がでてきますね。これはお釈迦様のことなんですけれども、雪の中で修行をしておる。そこに声が聞こえてくる。どういう声かといったら、「諸行無常 是生滅法」と。あらゆるものは永遠に続くものはないですよ。若くても歳をとるし、常ならんというのですから、先ほどの椿

の花もポトツと落ちるわけです。これが諸行無常。「是生滅法」、この世の中のあらゆるものは、生まれては滅んでいくものですよという声が聞こえてきたわけです。これだけの声が聞こえてきても、答えにならない。娑婆ははかないものですよ、ああそうですか、というわけにはいかない。これは誰が言っているのだろうと思ったら、そこに鬼がおったんですよ。神様、仏様のような尊い人がおっしゃっているのではないのです。誰が言ったんだろうと思たら、ここにいるのはあの恐ろしい鬼しかおらんから、「お前が言ったのか」と言うのと、「そうだ私が言ったんだ」と。「でもこれでは結びになつておらんだろう。この続きがあるはずだろう。教えてくれ」と言うわけですよ。すると、「わしは腹減つてもう喋れんのや」と鬼が言うわけですよ。「わしが食べられるものは温かい肉、それと温かい血しか飲まんのや」。要するに生きた人間しか食わないということですよ。「分かった、私の身体を食わせる約束をするから、その続きを聞かせてくれ」と言うんで

すよ。「結びを聞きたい。でも私が聞

くだけではなく、その尊い結び、結論を息子にも娘にも孫にもひ孫にもずっとその大事なことは伝えたい」と言つて、聞いたその続きを木とか岩を彫つて書いたわけですよ。そこに書いておけば誰かが読んでくれるだろうと。さあ、これで食べてくれと、鬼のところへ飛び込んだら、鬼ではなくて帝釈天、神様だった。「お前は本当に求める気がある人間だな」と。続きの言葉を書くことが出来た。「消滅滅已、寂滅為樂」と。ここまで聞いて結びになる。こんな漢文で書かれても難しいですよ、だから昔の人はちゃんと分かるように直してくれた。それが皆さんもよくご存知のいろはうたです。

「いろはにはほへとちりぬるを わがよたれぞつねならむ」「色はにほへど散りぬるを」(諸行無常)、どんな美しい花でも必ず散ってしまう。「我が世たれぞ常ならむ」(是生滅法)、私たちは限りある命を生きておる。「有為の奥山今日越えて」(生滅滅已)、「浅き夢見し酔ひもせず」(寂滅為樂)、漢字でかくとわかりやす

い。「有為」とは、因縁によつて生ま

れているもの。種を蒔いても必ず花が咲くとは限らないですよ。お日さんの光があつて、水があつて、その土に肥やしがあつて、そしてカラスがほじくらない、そうしたら秋には実を結ぶかもしれない。この娑婆のものは皆有為。有為法という。要するに娑婆のものはみんな変化する。因縁、因があつて縁があつて果が結ぶわけですよ。仏法はこの縁を大事にします。キリスト教とかイスラム教は一神教でしょう。神様の仰せだと。因と果だけの中で生きておる。仏法では因だけあつても駄目なんだ。縁が因を規定しているわけです。むしろ因よりも縁のほうが大きな力を持つておる。因と縁と果で物事が出来ておる、それを有為ということです。そうでないものはない。私もおばあちゃんも、みんな両親がおつて生まれてきて、おかげさまで今日まで生きておるんだから、今日こうしてお太子さんにお参りさせていただいているわけでしょう。私は歳だから今日お参りできると思われ

ている方が中にあるかもしれないけれども、それはやっぱり縁がなかったらお参りできませんよ。

「奥山を超えたら」どういう世界があるか。私たちはその有為の世界におりながら「浅き夢見し」浅い夢を見ておるわけです。いつまでも元気で、いつまでも若く・・・だからその夢から覚めたら見えてくる世界が全然違つてくる。その夢から覚めたところに安らぎがある。ありのままに世の中を見ないといけない。仏さんとはどういう人か？それは目覚めた人である。夢見ていたら目覚めていませぬよ。今日も皆さん、元気で目覚めになつてよかったですけれども、仏さんとは本当に目覚めた人だ。皆が目覚めんといかんとそう書いてある。目覚めるとはどういうことかと言つたら、ありのままに物事を見るところ。自分の都合のよいように見るのではなくて。私たちも目覚めたら皆仏さんですよ。でもこの娑婆におつたらなかなか目覚めらんからお浄土に往生して目覚めましょうと言つておるわけですよ。ありのままのことをどう見る

かということが大事だと言つて書いてある。頭で分かつてもやつぱり納得できない。頭のなかで分かつた通りにできるのであれば論も釈もなにもなくても、もうちよつとまともになると思うけど。わかっちゃいるけどやめられないんですね。

植木等さんが今度スーダラ節を歌うことになつた時、お父さんに「あんな無責任な歌を私は歌いたくない」と相談したそうです。そしたらお父さんが「歌詞をちよつと見せてくれ。いいじゃないかこれ。親鸞聖人の教えではないか」と言われたそうです。植木等さんのご実家は真宗のお寺ですわね。お父さんがご住職。わかっちゃいるけどやめられない。これ凡夫のことや。わかつた通りに行けるのだつたらもつと世の中上手くいくはずだ。でも、わかちやいるけどやめられない。これは御開山の教えだ。そしたら大ヒットしたんでしよう。仏さんという人は目覚めた人だ、ありのままに物事を見る人だとわかつたけれども、どうすることもできない。

私はいつも思うのですが、生き方といったら方法とか仕方のことだと私たちは思うわけです。東日本大震災で電力が問題になった。節電しましょう、それは方法です。どこに向うのかという方向の方が大事。どこに向かって生きるのか。それがなかったらいくら方法や仕方を考えても駄目だと。来年、北陸新幹線が開通しますが、東京へ行くのに九州新幹線に乗ったら新幹線に乗っておつても鹿児島に着くかもしれないけれども、どれだけ乗っておつても東京には着かないわね。どこの方向に向かって生きるのかということが、生き方として大きな問題だと。それが目覚める、気づくということだと思います。方向さえ間違っていないから一歩一歩、歩いてもいつか着きますよ。

鈴木大拙先生のお住まいの前には百三十段の石段があるんですよ。九十を過ぎて、毎日その石段を上り降りしなければならぬ。「先生九十も過ぎて大変ですね」と、皆こう言う。「いやーなんともないですよ。一段一段ですよ」と先生。エレベーター

でもつけてくれよと思っていれば、毎日不平不満が起るかもしれないせん。お陰で足腰が丈夫になると考えていたら石段を上るのも楽しみになってくるかもしれない。方法ではなく方向。方向が定まればまた方法は見えてくるわけです。親鸞聖人は比叡山で二十年修行したけれども、どうしてもどう生きたらいいのかということが見えてこなかった。それで六角堂へ行かれて聖徳太子さまにあつて、そして法然上人のところで本願念仏の教えに触れた。そういう自分の進むべき道の方向が明らかになるということがとても大切なことだと思います。それが、「浅き夢見し」、夢を見ておつたらね、なんで私だけが不幸なんやという思いが必ず起こってくる。

今日皆さん、仏法をお聞きいただいているわけですから、「聴聞」とこう言いますわね。「聴聞」は、声を待つ、どうしても聴きたいなど。耳が声を待っておる。如来の声を待っている。そして「聞く」は、その声を受くるということです。京都に天龍寺というお寺がありま

すわね。江戸、明治にかけてそこに峨山がざんというとても有名な和尚さんがおられた。ある勉強ができた青年が和尚のことをとちめてやるうと天龍寺を訪れた。でも挨拶は丁寧で「和尚さん、教えを聞きに来ました」と言うけれども、我山和尚から見れば、根性が見え見えなわけです。どうぞ、どうぞと招き入れて、お座敷でお茶でもどうぞと、急須でお茶を注ぐ。小さい茶碗ですからすぐに一杯になるわね。やがて溢れてくるわね。一杯になつてもずっと・・・和尚大丈夫ですか、お茶が溢れてますよ」と驚くのですが、そのうちに賢い青年ですから、気がついたわけです。何を和尚が言いたいのか。胸に一物を持つておつたら聞こえるものも聞こえてこない。根性を空にした

いと駄目ですよということも言いたかったわけですね。お茶が一杯になつていたら、一滴も入りませんよ。今日は、仏法を聞きに来ましたというよりも、もともと聞こうというよりは、あの和尚を懲らしめてやるうと思つてきているのだから、一滴も入らない。人生も思い通りにいかずに

不平不満で一杯だったら、聞くことができないですね。

島秋人しまあきとという歌人がいるんですけども、旧満州で生まれた人です。貧しくて食べるものもない。ある日、雨の中をとぼとぼと歩いていたら家があつた。戸を開けようとすると鍵が開いていて、その家の中に入ると二千円があつた。腹が減つてお金もないからそのお金を失敬したら、その家の人に見つかつた。もみ合いになつてその人を殺めてしまった。そして、裁判で死刑の宣告を受けてしまった。二十二、三歳の時です。刑務所に入つて、過去を振り返つた。褒められたことなど一度もなかった。でも中学校の時の図工の先生が褒めてくれたことがあつたと思ひ出す。その先生に手紙を書きたくなつて手紙を出したら、その先生から返事が来た。先生の奥さんが歌を作つておられて、三首書いてあつた。それを見て、私も歌を作つてみたいと思ひ、歌を作り始めた。それが本になつていて私も大拙館へ行く時に一首づつ読んでおるのです。

刑務所は孤独です。差し入れのお菓子を置いておくとアリが寄ってくる。そのアリとお話するのです。アリの対話、いのちの対話ですよ。非常に感銘を受けた。「愛に飢餓し死刑囚われ賜わりし菓子地に置きて蟻を待ちたり」、「助からぬ生命と思へば一日のちひさな喜び大切にせむ」。いざ自分の命が限られていると思つたら、ああ今日雨が降ってもお陰さま。今日は花を見ることができてお陰さま。

く さ む す び  
こんなことも書いてます。寿命が長いとか短いというのは問題ではない。やはり自分が本当に幸せと思えるかどうか。褒められたことが一度もなかったけれども、その歌に会って一生懸命裸になりきって真を力に歌を詠んだ。愚かなままに歌の道に喜びを見出したと書いてある。だから外に出れば楽しいことがあるかもしれないけれども、その中で何かを見出そうとしたわけですね。

そして、きょうかいし 教師さんがこういうことを言われた。「きみは無期懲役だったらこうはならなかっただろう。死刑囚だからこうなったんだ」と。限

られた命だと思うからこうなれたんだと。しかし、私はそれを読んだ時に、私だつて限られた命を生きておるのではないかと気づかされました。いつ無常の風が吹いてくるかわからなくても平均寿命を見て、あと何年生きれるかなと勝手に思っておる。浅き夢を見ているようなものです。与えられた今の中でどう生きるかということを真剣に考えておらん。私はこの歌を読んで、この人は人を殺めたという不幸な業縁に遭うたけれども、それによって命の尊さに気づいた。そうしたら段々段々ご飯をいただく時にニコツと笑みが起こってくる。そういうような生き方をできたらこれは、アリさん、よく私のところに来てくれたところなる。でもこんな特殊なところの中でなくてもね、やっぱり彼が言うように限られた命と思えば、一日の小さな喜びを大切にしたいですね。

今日浄光寺さんのお太子さんにあつた阿弥陀さんの声、聖徳太子の声、あるいは観世音菩薩のお声を聞いていただいたら、やっぱり尊い

仏縁になるんじゃないかなと思うんですね。親鸞聖人の教えは凡夫は凡夫のまま救われるところおっしゃっておるわけですが、やっぱりそこには何か聞こうという気持ちがないといけないと思うんですね。

因幡いなばの源左げんざという有名な妙好人みょうこうにんの方がいますけれども、その源左がこういうことを仰せになっていますね。

「ただのただでもただならず 聞かねばただは貫われぬ 聞けば聞くほどただのただ はいの返事もあなたから」。要するに私たちは、あんな修行をしないとかこうしなさいと条件が付いているわけでもない。凡夫のまま救われる。それではそのままでいいかといったら、「ただのただでもただならず、聞かねばただはも

らわれん」、要するにこう聞かせてもらうことによってそのことに頷かせていただく、その結果ハイと言えようかな人生を行っておられるわけです。そういう世界があることを聖徳太子や親鸞聖人が私たちに告示しただいておる。浄光寺さんがお念仏の伝統をずっと皆さんのお力添えを得てですね、こうして今日まで続

けて頂いた。そのことを考えれば考えるほど尊いことだ。時間的には無限の広がりがある。自分の家と自分の世界だけがすべてだと思うけれども、奥は深く外は広いんですよ。やっぱりそのことに気付かせていただいたい。日々の日暮しが随分違ってくるんじゃないでしょうか。限られた命を生きているのに不平不満で眉間に皺しわよりも、ご飯をいただいでニコツと笑えるような人生を送ることができたらこれは幸せなことではないかと思ってしまうけれども、いかがでしょうか。みなさんどうもありがとうございました。

#### 《へんしゅうこうき》

◇本文は平成二六年三月二一日「お太子さん」の法話録であります。洵まことに勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきます。

◇親鸞聖人は、「大慈救世聖徳皇」と聖徳太子さまを単なる歴史上の人物としてではなく、現にここに生き生きとお導きいただいているおはたらきとして受け止められました。それが本当に出遇うということなのでしょう。私たちは、お太子さんや親鸞聖人に本当に出遇っているのでしょうか。何を伝えようとしてくださっているのか聞かすにはおられません。